

## 正月の風

宮 口 侗 迪

先日、初めて上越新幹線に乗る機会があった。それほど典型的な冬型の気圧配置でもなかったのだが、昼近くに新清水トンネルを抜けたとたんに、外はあまりにも暗くて白い世界だった。そんなことは先刻承知といわれそうだが、それまでの車中で野暮な仕事に気をとられていたので、よけいに眼をみはるようになった。そういえば、冬の上越国境を越えたのはずいぶん久しぶりのことだった。

私は富山県の山村の生れで、地元いろんなつき合いがあるために、ひと冬に2回は東京と北陸を往復する。しかしこの5～6年の間、冬の往復には殆ど東海道新幹線を利用してきた。上信越線を避けてきた理由は、何よりもスキー客の傍若無人さがいやだったからである。大きい荷物をあたり構わず置き、けたはずれ大声で騒ぐ連中と隣り合うと、けんかにもなりかねない。というわけで、康成先生以来誰もが知っているトンネルのむこうの雪国には、長くお目にかかっていなかったのである。

\* \* \*

「もういくつねるとお正月」という唄を子供のころ教わった。この唄には、「お正月には風揚げて」という一節があるのは殆どの人が知っている。さて、雪国で風は揚がっただろうか。また、風はあったのかどうか。

私の生れたムラは岐阜県に近く、国鉄高山線の富山県最後の駅があり、「よろず屋」と呼ばれる雑貨店も数軒あった（ちなみにこの駅は「猪谷」といい、イノシシ<sup>イノシシ</sup>歳にあたる今年の元旦には、どこからか入場券を大量に買いに来たものがいて、駅長をびっくりさせた）。当時のよろず屋には想像を絶する程の種類の商品がぎっしりと並べられていたのだが、その中に確かに奴風があった。

この奴風は当時の乏しいお年玉で十分買える程度の値段であった。

私たちは、正月に風揚げをするものだといふこ

とを“学ん”だ。そしてお年玉で奴風を買った。風は揚がっただろうか。

北陸の正月には、一日ぐらいポッカリと晴れる日がある。しかしこの時は風がない。風のある時はたいてい雪降りである。私達は風を揚げようとしてムラの道を走った。今と違って自動車は全く通らなかったが、雪の上はそんなに早く走れるものではなく、揚げりそうになった風は、数回転してすぐに落っこちた。吹雪の中で風揚げを試みたこともあったかも知れないが、とにかく私には、風揚げは失敗に終わった記憶しかない。それでも風は正月に揚げるものだと思ひ、それ以外の時期によらず屋に風がぶらさがっていることもなかった。

いうなれば、「正月の風」は中央政府のリードによって、教育を通じて、風土をこえて地方に伝わった。風が存在には商業の力もかかわってくるが、それはさておき、このことは、それを受け入れなければならなかった地方の側が、特に精神生活にかかわるものの受容の過程で、国家と個人の間に介在する力を大きく欠いていたことを、残念ながら象徴するのではなからうか。

\* \* \*

新婚までもない、まぶしいくらい美しかった担任の先生からこう教わりたかったと今にして思う。本来なら富山弁で書きたいところであるが…。

「正月に風が揚がるところと揚がらないところがあって、あなたたちの暮しているところは揚がらなくて当然なのよ。そのかわり、東京の子供達は雪あそびもスキーも出来ないのよ。」

というわけで、私には長く風に対するわだかまりがあった。そのことが地理学の世界に足をふみ入れたことに少しはかかわっているかも知れない。

ちなみに、風が本当に揚がるものだという実感を持ち得たのは、3年ほど前の2月の日曜日息子と共に、扇大橋に近い荒川の土手の上でゲイラ風

を揚げた時のことであった。

(早稲田大学)

## 僕の窪町界限

横 田 忠 夫

今年の4月の初旬、お茶大の地理学教室に久しぶりに御邪魔したのだが、旧館にあった昔の教室のあたりをうろついて見当たらず、近くにいた高校生からまだ抜け切っていないような可愛い学生さんに尋ねてやっと教室にたどりつくことができた。

講義の後、事務室で式先生に昼食をとるよい場所を伺うと茗溪会館の地下にあるグリルが落ち着いていてよいと云われたので、早速その日から毎週金曜日にはそこのテーブルに腰を落ちつけてゆっくりとランチを肴に生ビールを傾けることとした。ところで酔が廻ってくると憶い出されたのは長くて短いこの窪町界限と僕とのつき合いである。

昭和7、8年頃、つまり50年程前、僕は父に連れられてすぐ上の姉とこの会館のホールでクリスマスパーティーに出席したことがあった。父は高師の出身であったから多分茗溪会主催のパーティーにでも下の2人の子供を連れ出したものらしい。

クリスマスツリーと多くのデコレーションに包まれた会場の華やかな雰囲気ですべて初めてのパーティーに興奮したが、ジングルベルの音楽とともに頭に浮んできた。当時僕は6つか7つ、父は僕が晩年の子であったのでちょうど僕の年頃であった。

それから10数年をへた昭和25年の初春、東大からお茶大に移られた松井勇先生をお訪ねしたことがあった。

それは旧館の教室であったが、大学院学生であった僕は松井先生に指導教官になって戴いていたので、その指導を受けに訪れたのである。その時指導の他に東大付属の講師になることを勧められ、その年の4月から中野にある付属に通うようになり、やがてそこの専任教官となった。東大付属の教員は既婚者が多く、独身の若い者は男2人、女性2人であった。

食べ物もなく、楽しみの少ない時期であったからか、その中からまもなく一組のカップルが生まれた。それが僕と家内である。

家内は女高師の数学科の出で、数学科の亀谷先生の推めで東大付属に赴任してきたのであった。

そして家内は結婚後、お茶大の3年に編入学して数学科の学生となり、僕はその父兄となったので卒業までの前後にたしか3回窪町を訪れている。

始めは編入学が決まらぬ前に2人で数学科に呼び出しをうけた時（あれは父兄面接というやつだったのだろうか！）、そして女房の在学中、ケンブの演奏会が講堂で催された時、そして卒業式の3回である。

卒業式は女房の妹も同時に卒業したので2人の父兄として出席したが、今考えるとすでに27才になる息子も女房のお腹の中でこの式には列席したことになる。

その後は学会がお茶大で開かれる時とか、確か僕の初めての著書を松井先生にお届けしに行った時とか、たまにお邪魔するだけであったので、文教育学部や理学部の新館にはまだお目にかからなかったのである。

しかし、お茶大地理出身の方とは、東大付属の僕の後任になられた讃岐（小野）さんとか以前に山梨大にいた時卒論のお手伝いをした金子さん、都立大時代同僚であった和田さん、三輪（太田）さん、僕が指導教官をした野村（須磨）さんとかお付き合いは多くあり、家内の友人の中に大学に残った人があったので何時も親しみは感じていた。

僕の講義は9月までの半年、大学院生3人というこじんまりしたものであったが、トランジスタラジオ持参で音楽や朗読と一緒に聴くなどしたのでどうも学生諸嬢をビックリさせたようであった。ともかく、授業後の茗溪会館での昼食が目的で